

部分を有しない極微に場所的前後関係は存在し得るか（真鍋智裕）

部分を有しない極微に場所的前後関係は存在し得るか

——カマラシーラとシュバグプタとの対論(2)——

真鍋 智裕

1. 問題の所在

インド大乘仏教中、この世界は識に過ぎないと説く唯識学派において、ヴァスバンドゥ（世親, Vasubandhu, A.D 4th）の『唯識二十論』（*Viṃśatikā vijñaptimātratāsiddhi*, *Viṃś*）以来後世に至るまで、識とは別に外界に存在すると考えられている対象の実在性が否定されている。一方、唯識学派以外の外界実在論に立つ学派は、唯識学派の外界の実在性批判に対して再批判を与え、外界実在論を擁護している。この論争は、仏教がインドから姿を消した後も様々な論書で論じられている。

Viṃś 以来、唯識学派の外界対象批判は、外界実在論者によって外界の対象を構成していると考えられている極微（*paramāṇu*）が実在しないことを論証する形で行われているが、外界実在論に立つ説一切有部に属すると考えられているシュバグプタ（*Śubhagupta*, ca. 720-780¹）は、その著書 *Bāhyārthasiddhikārikā*（BASK）の中で極微の実在性を擁護している²。更に、インド後期大乘仏教の瑜伽行中観派に属するカマラシーラ（*Kamalaśīla*, ca. 740-795³）は、師シャーンタラクシタ（*Śāntarakṣita*, ca. 725-788⁴）の著書 *Tattvasaṃgraha*（TS）に対して著した注釈であり、唯識学派の立場に立つ *Tattvasaṃgrahapañjikā*（TSP）ad TS 1989-1991⁵において、このシュバグプタに対して批判を加えている⁶。

著者は以前この TSP ad TS 1989-1991 におけるカマラシーラとシュバグプタの対論の前半部に関して研究発表を行った。対論の前半部の内容は、外界実在論者によって、部分を有しないものと考えられている極微の実在性を否定するシャーンタラクシタとカマラシーラが「極微の集積を想定した場合には極微が方位による支分の区別（*digbhāgabheda*）や有部分性（*sāvayavatva*）を有することとなり、極微の単一性が否定される」と極微の単一性を批判するのに対し、極微

¹ See Frauwallner[1961].

² シュバグプタの極微説擁護に関しては神子上[1983]を参照。

³ See Frauwallner[1961].

⁴ *ibid.*

⁵ TS の偈文番号は TSP(Śā)に従う。

⁶ この対論は TS に見られず、TSP のみで見られるものである。また、極微に関するシュバグプタとの対論は TSP ad. TS 1969-1978 にも見られ、ここでの主題は極微が認識根拠（*pramāṇa*）によって論証されるかどうかということである。See Jha[1987] pp. 1009-1013, 菅沼[1981] pp. 575-580, 神子上[1997] pp. 93-98. この対論に関する先行研究としては、一郷[1985a], [1985b], 神子上[1997], 栗原[1999]がある。また、森山[2003]では、シャーンタラクシタとカマラシーラの極微批判の思想的先駆者としてシャーキャブッディの存在を指摘している。

の实在を主張するシュバグプタが「極微が方位による支分の区別を有する場合にも極微の単一性つまり無部分性 (anamsatva) は否定されない」と反論するものであった。研究発表では、この対論におけるカマラシーラの主張とシュバグプタの主張との対立は、シュバグプタは「方位による支分の区別」を極微それ自体にある性質とは考えていない一方、カマラシーラは「方位による支分の区別」を、もしも極微が集積するとすれば極微それ自体に無ければならない性質と考えていた、という「方位による支分の区別」に対する見解の相違によるものであることを明らかにした⁷。

本稿で取り上げるカマラシーラとシュバグプタの対論の後半部では、部分を有しない極微に場所的前後関係 (deśakṛtaṃ paurvāparyam) があり得るかどうかという問題が論点となっている。この問題に関しても、カマラシーラとシュバグプタとには、「時間的前後関係」 (kālakṛtaṃ paurvāparyam) と「有形であること」 (mūrtatva) という、対論において重要な役割を果たす概念への理解の相違が見られ、両者の主張の対立はこれらの概念に対する理解の相違に基づくものであると考えられる。従って本稿では、カマラシーラとシュバグプタに「時間的前後関係」と「有形であること」という概念に対して、どのような理解の相違があるのかということを明らかにする。

2. 極微の場所的前後関係を巡る対論

2.1. シュバグプタからの反論

以下に、シュバグプタとカマラシーラとの対論の後半部の内容を検討する。対論の前半部の最後に、カマラシーラは、部分を有しない心・心所が多くのものに取り囲まれないのと同様に、部分を有しない極微が多くのものに取り囲まれることはないとして、極微が集積するというシュバグプタの主張を批判していた⁸。このカマラシーラからの批判に対し、シュバグプタは、部分を有しない心・心所に、時間に関して過去・現在・未来という連続があるのと同様に、部分を有しない極微に多くのものに取り囲まれること、即ち場所に関して前後という連続があると反論する。

TSP(Śā) 678, 20-679, 1; TSP(Kri) 556, 27-557, 557-3: syād etat. yathā vartamānacittakṣaṇasyātītānāgatābhyām⁹ cittakṣaṇābhyām¹⁰ kālakṛtanairantaryam asti, atha ca na varta-

⁷ See 真鍋[2010].

⁸ See 真鍋[2010] p. (113).

⁹ °cittakṣaṇasya° em. (sems kyi skad cig Tib.)] °cittalakṣaṇasya° ms1, ms2, TSP(Śā), TSP(Kri).

¹⁰ cittakṣaṇābhyām em. (sems kyi skad cig dag Tib.), citta{la}kṣaṇābhyām ms1] cittalakṣaṇābhyām ms2, TSP(Śā), TSP(Kri).

mānacittakṣaṇasya¹¹ kalāmuhūrtādivat sāvayavatvam¹², evam aṇūnām saty api bahubhiḥ parivāraṇa na deśakṛtaṃ sāvayavatvam bhaviṣyati¹³.

以下のような〔シュバグプタからの〕反論があろう。「現在の心の刹那に、過去と未来の心の刹那との時間に関する連続（nairantarya, 間隙が無いこと）がありながら、しかも現在の心の刹那が、カラーやムフルタ等〔という時間の単位〕の如く部分を有しないものであるように、それと同様に、諸極微に、多くのものによって取り囲まれることがあったとしても、〔諸極微が〕場所に関して部分を有することはないだろう」。

部分を有しないものである現在の心の刹那には、過去と未来の心の刹那との間に、過去・現在・未来という時間に関する連続がある。それと同様に、部分を有しないものである各々の極微にも、他の多くの極微によって取り囲まれること、即ち場所的な連続があるというのである。ここで「現在の心の刹那がカラーやムフルタ等の如く部分を有しないものである」ということは、カラーやムフルタという時間の単位¹⁴が、単位としては部分を有しないのと同様に、現在の心の刹那も部分を有しない、ということであると考えられよう。

ここでシュバグプタは、時間的連続性と場所的連続性を「連続性」という観点から類比的に捉えていると考えられる。そのため、部分を有しないにも関わらず、心の刹那に過去・現在・未来という時間的な連続性があることから、同じく部分を有しない諸極微にも場所的な連続性があると主張しているのである。これは、カマラシーラが「部分を有しない心・心所が多くのものに取り囲まれないのと同様に、部分を有しない極微が多くのものに取り囲まれることはない」と、諸極微は集積し得ないという自身の主張の喩例として心・心所を挙げていることに対して反論を加えたものである。

¹¹ °cittakṣaṇasya ms1, ms2] °cittalakṣaṇasya TSP(Śā), TSP(Kri). Cf. sems kyi skad cig Tib.

¹² atha ca na vartamānacittakṣaṇasya kalāmuhūrtādivat sāvayavatvam ms1, ms2, TSP(Śā)] atha ca vartamānacittakṣaṇasya (na) kalāmuhūrtādivat sāvayavatvam TSP(Kri).

¹³ Cf. BASK 50-51: gal te mang por 'dab chags phyir // cha shas bcas par 'dod na ni // skad cig snga phyi 'dab chags la // ci phyir de dang 'dra mi 'gyur //50// shes pa'i skad cig gnyis dag gis // 'dab chags yin yang de la ni // cha shas bcas gzugs mi 'dod ltar // rdul phran rnams la'ang de bzhin no //51// （もしも、多くのものに伴われているから（*pakṣin?）部分を有するものであると考えられるならば、前後の刹那に伴われている場合、どうしてそれと同様でないのか（部分を有するものと考えられないのか）。知が、〔前後の〕二つの刹那に伴われていても、それには部分を有するというあり方が認められないように、諸極微に関しても同様である（部分を有するというあり方は認められない））。

¹⁴ ヴァイシェーシカ学派によれば、時間の単位には以下のものがある。See PBh 63, 19-21: kṣaṇalavanimeṣakāṣṭākālamuhūrtayāmāhorātrārdhamāsamāsvartvayanasaṃvatsarasayugakalpamanvantara-pralayamahāpralayavyavahārahetuḥ （〔時間〕は〕刹那・ラヴァ・ニメーシャ・カーシュター・カラー・ムフルタ・ヤーマ・昼夜・半月・一月・季節・半年・一年・ユガ・劫・マヌ期・還滅期・大還滅期という言語慣習の原因である）。

2.2. カマラシーラのシュバグプタ批判

以上のシュバグプタからの反論に対して、カマラシーラは、先ず、心の時間的連続性は勝義としては存在しないことを指摘する。

TSP(Śā) 679, 3-5; TSP(Kri) 557, 3-7: tad etad asamyak. na hi vartamānacittakṣaṇasya¹⁵ pūrvottarābhyāṃ nairantaryāṃ paramārthato 'sti, tadānīm tayor asattvāt, na cāsātā saha paurvāparyāṃ bhāvikāṃ yuktam.

そのことは正しくない。何故ならば、現在の心の刹那に、前後〔の心の刹那〕との連続は勝義としてはないからである。その（現在の）〔刹那〕に両者（前後の刹那）は存在しないから。しかも、〔現に存在するものと〕存在しないものとの真実なる前後関係は、道理に合わない。

現在の心の刹那には過去・未来という前後の心の刹那は存在していない。しかも、如何なるものにも存在しないものとの間に成り立つ前後関係、即ち前後の連続性があることは有り得ない。以上のことから、現在の心の刹那が、存在していない過去と未来という前後の心の刹那と連続性を持つことはないのである。ここで、勝義には現在の心の刹那には過去・未来の心の刹那が存在しないとは、勝義には現在の心の刹那のみが存在するということである。カマラシーラは、このように指摘することによって、シュバグプタの、場所に関する前後という連続と同じように、時間にも前後という連続があるという考え方を真っ向から否定しているのである。

しかしカマラシーラは、時間的前後関係が如何なる意味においても存在しないと考えているわけではない。続いてカマラシーラは、諸の存在に因果関係があることを認めることによって、時間的前後関係が分別されるものであることを論証する。先ずカマラシーラは、諸の存在するものには因果関係が成立することを明らかにする。

TSP(Śā) 679, 7-9; TSP(Kri) 557, 7-9: na tāvad ahetukatvaṃ bhāvānāṃ yuktimat, nityaṃ sattvādiprasaṅgād iti yo 'pi sāmṃvṛtatvaṃ bhāvānāṃ pratipannaḥ, tenāpy avaśyaṃ sarvabhāvānāṃ sahetukatvaṃ eṣṭavyam.

先ず、諸の存在するものが原因を持たないものであることは道理に適うことではない。〔もしも諸の存在するものが原因を持たないものであれば〕常に存在するなどの過失になってしまうから。よって、諸の存在するものが世俗のものであると理解した人、その人によっても、全ての存在するものは必ず原因を有するものであると認められねばならない。

もしも諸の存在するものに原因が存在しないとすれば、原因のないものが消滅することは有

¹⁵ °cittakṣaṇasya ms1, TSP(Śā), TSP(Kri)] °cittalakṣaṇasya ms2.

り得ないので、常に存在し続けるということになってしまう。しかし、如何なる常住な存在するものも有り得ないので、諸の存在するものは必ず原因を有するものである。このことは、諸の存在するものは世俗的なものに過ぎず、勝義には存在しない¹⁶ということを理解した聖者によっても、存在するものが現に存在しているという世俗の立場においては認められなければならない。このように、諸の存在するものが現に存在していて、その存在するものには原因がなければならないということから、結果たる存在するものとその原因との因果関係が導き出されるのである。

以上のように、諸の存在するものには因果関係が成立することを明らかにしたところで、カマラシーラは全ての原因は必ず結果よりも先に存在すると述べる¹⁷。

TSP(Śā) 679, 9-12; TSP(Kri) 557, 9-12: sati ca sahetukatve na tāvat samakāle kāryakāraṇe yukte. nāpi prāk kāryotpatteḥ¹⁸, kāraṇasyāsattvenāsāmarthyāt. paścād api kārye samutpanne hetor anupayogāt. ataḥ prāgbhāvaḥ sarvahetūnām avaśyam āṅgikartavyaḥ.

そして、[存在するものが] 原因を有するものである場合、先ず、同時に結果と原因があることは道理に合わない。また、[結果と同時にある原因は] 結果が生起するより前には存在しない。[そして] 原因は存在しないので、[結果に対する] 能力を持たないから¹⁹ [同時

¹⁶ シャーンタラクシタの『中観莊嚴論』(*Madhyamakālaṅkāra*, MA) 64 において、一切のものが勝義としては成立しないことが説かれており、MA に注釈を著したカマラシーラも師と同様に考えている。See 一郷[1985c] p. 95.

¹⁷ この議論に関して、カマラシーラは議論の典拠としてダルマキールティ (*Dharmakīrti*, ca. 600-660) の *Pramāṇavārttika* (PV) III 246 を挙げている。そのため、以下の一段は PV III 246 と、PV III 246 に対応するダルマキールティの別の著書 *Pramāṇaviniścaya* (PVin) の記述を参考にして解釈を施した。また、TS(P) 515 にも同様の議論がなされているのでこれも参考にした。PV III 246 は以下のようなものである。See PV III 246: asataḥ prāg asāmarthyāt paścād cānupayogataḥ / prāgbhāvaḥ sarvahetūnām nāto 'rthaḥ svadhiyā saha // ([結果が生起するより] 前に [原因が] 存在していないが故に、[原因が結果に対する] 能力を持たないから、また、[結果が生起した] 後に [原因の能力は] 不要であるから、全ての原因は [結果の生起] 以前にあるものである。それ故に、対象はそれ自身についての知と共に存在しない)。PV III 246 に関しては戸崎[1979] pp. 344f., PVin に関しては戸崎[1989] pp. 15f. を参照。

¹⁸ 'bras bu skye ba las Tib. for nāpi prāk kāryotpatteḥ Skt.

¹⁹ PV III 246 に対するプラジュニャーカラグプタ (*Prajñākaragupta*, ca. 7-8th) の注釈 *Pramāṇavārttikabhāṣya* (PVBh) は以下のように注釈している。See PVBh 306, 16f.: hetur viśayaḥ, na ca hetor phalena samānakālatā. phalena samānakālatāyām hi prāg asattvam, asataś cāsāmarthyam prāk (対象とは原因であり、そして、原因が結果と同時のものであることはない。[原因が] 結果と同時にある場合には、[原因は結果の生起より] 前に存在しないものであり、更に [結果の生起より] 前に存在しないもの (原因) は [結果に対する] 能力を持たないから)。また、本文のこの箇所に対応する TS 515 とそれに対する TSP は以下のものである。See TS 515a: asataḥ prāg asāmarthyāt ([結果の生起より] 前に存在しないものは [結果に対する] 能力を持たないから)。See TSP(Śā) 218, 22f.; TSP(Kri) 176, 2: tasya kāryotpatteḥ prāg asattvāt. asataś cāśeśasāmarthyasūnyatvāt ([原因は] その (原因の) 結果の生起より前には存在しないから。更に、存在していないものは全く

に結果と原因の二つがあることは道理に適わない]。後に「原因が存在するようになり、結果に対する能力を獲得した場合」も、結果が「既に」生起しているので、原因は不要となるから²⁰「同時に結果と原因の二つがあることは道理に適わない」。従って、全ての原因は必ず「結果よりも」前に存在すると承認されるべきである。

カマラシーラは、同時に特定の結果とその原因があることは道理に適わないという観点から、特定の原因は必ずその結果よりも先に存在するものであることを論証する²¹。その論証は以下

能力を欠いているから)。

²⁰ See PVin 19, 9f.: *sāmarthyakāle ca kāryaniṣpatter anupayogāt* (更に、「原因が」能力「を獲得した」時、結果は「既に」成立しているので、「原因の能力は」不要となるから)。See PVBh 306, 17f.: *paścāt kāryakāle sāmarthyam iti cet. karmakāle kāryasya vidyamānatvād vyartham sāmarthyam. evaṃ hi sa kāryasya kālah, yadi tadā kāryasya sattvam.* (後に、即ち結果「が生起する」時に「原因は」能力を持つ、という「反論がある」とすれば、「その反論に対して答える。原因が」働いている時、結果が存在しているので、「原因の結果に対する」能力は無意味である。もしもその「原因が働いている」時、結果が存在するとすれば、そのようであれば、それ(原因が働いている時)が結果の「生じる」時である)。See TS 515b: *sāmarthyē kāryasambhavāt* (「原因が」能力を持つ時、結果が「既に」存在しているから)。See TSP(Śā) 218, 23-219, 11; TSP(Kri) 176, 2-5: *yadā tarhy utpannah, tadā samarthatvāj janayiṣyatīti ced āha. sāmarthyē kāryasambhavād iti. yadā hi tasyotpannāvasthāyām sāmarthyam, tadā kāryam iti tatsvabhāvavad evotpannam iti kvāsya sāmarthyam upayogam aśnuvīta* (「対論者が、」その場合、「原因が」生じた時に「その原因は」能力を持っているので、「結果を」生ぜしめるであろう、と「反論する」とすれば、「その反論に対して」答える。「原因に」能力がある時、結果が「既に」存在しているから、と。というのは、「原因が」生じた状態にある時に、それ(原因)が能力を持つ場合、その場合、結果とは、当にその(同時にあるという)自性の如く「既に」生じたものである。従って、その(原因の)能力は如何なるものに対して作用を及ぼそうか)。

²¹ PV III 246, PVin の議論は、意知覚の対象は意知覚と同時のものであり、感官知の共働因(*sahakārin*)とはならない、と主張する対論者に対して、意知覚の対象が感官知の共働因として意知覚を生じさせることを論証するために、原因たる意知覚の対象と結果たる意知覚とが同時のものであることを否定することによって、原因たる意知覚の対象が結果たる意知覚の前に存在することを論証するものである。See PVin 19, 8-10: *svajñānakālabhāvī tadatulyakriyākālo nārthah sahakāriti cet. na. ubhayos tulyakālatvāt ... jñānahetur viṣayasya sahabhāvo viruddhah* (「対論者が、」自己の認識(意知覚)と「同」時に存在する、それ(感官知)と作用する時を異にするもの(意知覚の対象)は、「感官知と」共に働く対象ではない、と「反論するとすれば、答える」。そうではない。「感官知と意知覚の対象の」二つは同時にあるものであるから.....認識の原因である対象が、「結果たる認識と」同時に存在することは矛盾している)。See PVBh 306, 15-19: *na hīndriyavijñānenāsamānakālo manovijñānārthah. tasya manovijñānāt pūrvakālatvāt ... ato 'rtho hetur na phalabhūtasvagrāhakajñānasamānakālabhāvī* (何故なら、感官知と異時のものは意知覚の対象ではないから。それ(意知覚の対象)は意知覚よりも前の時のものであるから.....従って、原因である対象(意知覚の対象)は、結果であるみずから把握する認識(意知覚)と同時に存在するものではない)。そして、TS 515 は同時の因果関係を批判するものである。See TS 515cd: *kāryakāraṇayoḥ spaṣṭam yaugapadyam virudhyate* // (結果と原因が同時であることは、明らかに「推論」と矛盾する)。また、本文に引用したテキストの直前に次のような記述もある。See TSP(Śā) 679, 4-6; TSP(Kri) 557, 4-6: *na cāsātā saha paurvāparyam bhāvikam yuktam. kevalam sahabhūtayor na kāryakāraṇabhāvo 'stīti taddvāreṇa parikalpya samutthāpitam pūrvāparayoḥ kṣaṇayoḥ sattvam* (また、実在しないものとの先後関係があることは、真実としては道理に適わない。同時に存在する二

のようである。先ず、同時に特定の原因（x）とその結果（y）があるとすると、結果（y）の生起以前にその原因（x）が存在していないので、原因（x）に結果（y）を生じさせる能力がないことになってしまうというのである。TS(P)においては、結果（y）に対して、原因（x）が決定された能力を持っていることによって因果関係が成立すると考えている²²が、この場合には原因（x）が結果（y）の生起以前に存在しないので、原因（x）に結果（y）に対する決定された能力がないことになってしまう、そのため特定の原因（x）からその結果（y）が生じるという因果関係も成立しないことになってしまう、というのである。しかしここで、「結果の生起以前に存在していない原因には、確かに結果に対する特定の能力が存在しないが、その後が生起し、結果と同時に存在している原因には、結果に対する能力が存在するであろう。従って、原因と結果が同時に存在することに問題はない²³」という反論が提起されるであろう。しかし、原因が生起して結果に対する能力を獲得した場合でも、同時に特定の原因（x）とその結果（y）があるとすると、原因（x）が生じた時には結果（y）も既に生じてしまっているので、原因（x）の結果（y）に対する能力は不要になってしまう。しかし、結果（y）に対する、原因（x）にある能力が不要であるということは不合理である²⁴。以上のことから、同時に特定の結果とその原因があるという前提が道理に適わないということが帰結されるのである。

ここで、カマラシーラは以上の議論の後、すぐに「全ての原因は必ず結果よりも前に存在すると承認されるべきである」と結論付けている。しかし、以上の議論によっては、原因と結果の同時因果が批判されただけで、原因が必ず結果の前に存在することの証明にはなっていない。原因が結果の前に存在することを証明するためには、後少なくとも「原因が結果の後に存在する」ことを否定しなければならないが、この証明は行われていないため、全体としては不完全な議論である感じを受けてしまう。しかし、先に、諸の存在するものが現に存在していて、その存在するものには原因がなければならないということから、結果たる存在するものとその原因との因果関係が導き出されることを確認したが、その際に、その現に存在するものを見て、

つのものに、結果と原因の関係はないという、単にそのことを通じて分別して、先後という二つの刹那があることが得られる）。以上のことから、ここでのカマラシーラの意図は、同時の因果関係を否定することを通じて、特定の原因は必ずその結果よりも先に存在するものであることを論証することにあると考えられる。

²² See TS 503: *pāramparyeṇa sāksād vā kva cit kiṃ cid dhi śaktimat / tataḥ karmaphalādīnām sambandha upapadyate* //（連続的に、或いは直接に、あるもの（y）に対してあるもの（x）が能力を有しているから、それ故に行為と果報等に結合関係が生じる）。

²³ See fn. 20.

²⁴ TS(P) 516-517 において、因果関係を行為と行為者との関係と捉え、因果同時説を擁護する対論者との議論が為されている。そこでカマラシーラは、行為と行為者の関係は法による規約（*dharmasamketa*）即ち此縁性によってのみ決定されるのであって、勝義には如何なる行為も行為者もないと批判している。See 清水[1983] p. 17. しかし、カマラシーラの主張する因果関係の決定要素も此縁性とされており、両者の違いの理解が難しいため、この TS(P) 516-517 の読解に関しては更なる研究を要する。

その原因がその存在するものの後にあると考える人は先ずいないであろう。因果関係の問題を扱っている TS(P) 第9章 Karmaphalasambandhaparīkṣā (行為と果報の結合関係の考究章)においても、結果の後に原因が存在するという主張は見られないので、カマラシーラは、常識的見解として「原因が結果の後に存在する」という選択肢を問題外のものとして想定していなかったのではないかと考えられる²⁵。仮にそのように考えると、以上の議論の結果、特定の原因は必ずその結果よりも前にあることが論証されることになる。

続いてカマラシーラは、以上のような特定の原因がその結果よりも先に存在することの論証によって、諸の存在するものには時間に関して前後関係が分別されるが、部分を有しないものには場所に関する前後関係は有り得ないと述べる。

TSP(Śā) 679, 16f.; TSP(Kri) 557, 13f.: tad evaṃ niraṃśatve 'pi sarvabhāvanām nyāyato²⁶ 'vasthitam kālakṛtam paurvāparyam. deśakṛtam tu katham syāt, yadi sāvayavatvam na syād iti codyate²⁷.

それ故以上のように、一切のものは部分を有しないものであっても、[一切のものには]論理に従って設定された、時間に関する前後関係がある。しかし、もしも部分を有することがないとすれば、どうして[一切のものに]場所に関して[前後関係]があろうか、と非難される。

特定の原因が必ずその結果よりも前にあることは、結果たる存在するものが部分を有するものであっても部分を有しないものであっても成立することであると考えられる。それ故、一切のものが部分を有しないものであっても、上述の論理に従って一切のものには時間的前後関係が分別され得るのである。しかし、ここでカマラシーラは、一切のものが部分を有するものではないとすれば、一切のものには場所的前後関係は有り得ないとシュバグプタを批判する。その理由に関してここでは何も述べられていないが、勝義として部分を有しない諸極微は、部分を有しないものであるので同一の場所を占めることになってしまう、ということが意図されていると考えられよう。部分を有しない諸の極微に場所的前後関係を想定しようとしても、その想

²⁵ 早稲田大学大学院博士課程佐藤晃氏から、TS(P) 482-483 の論敵の主張において、未来のもの (anāgata) を原因とすることが排除されており、シャーンタラクシタ、カマラシーラもそのことを認めていると言える、という指摘を頂いた。未来のものとは、結果よりも後のものということであろう。シャーンタラクシタもカマラシーラも、自説を述べるに際して、この論敵者の主張に対して特に言及している箇所はないようである。See 清水[1983] pp. 5f., pp. 12-15. そのため、このことを当然のことと考え、敢えて問題としていない、と考えられよう。

²⁶ nyāyato ms2, TSP(Śā), TSP(Kri)] nyāyeto ms1.

²⁷ de'i phyir de ltar dngos po thams cad rigs pas rnam par gzhas pa'i cha med pa nyid yin na yang gal te cha dang bcas pa nyid du ma gyur na yul dang dus kyis byas pa'i snga ma dang phyi ma dag tu ji ltar 'gyur zhes rgol na Tib. for tad evaṃ niraṃśatve 'pi sarvabhāvanām nyāyato 'vasthitam kālakṛtam paurvāparyam, deśakṛtam tu katham syāt, yadi sāvayavatvam na syād iti codyate Skt.

定を与えるべき諸極微の集積がそもそも成立しないのである²⁸。

ところで、以上の議論によって、カマラシーラはシュバグプタの主張の如何なる点を批判しているのだろうか。シュバグプタは、「連続性」という観点から時間的前後関係と場所的前後関係を類比的に捉えることによって、部分を有しない心に時間的前後関係があるのと同様に、部分を有しない諸極微にも場所的前後関係があると主張していた。カマラシーラは先ず、勝義には心にも時間的前後関係が存在しないことを明らかにし、更に部分を有しないものには、論理に従って時間に関しては前後関係が分別され得るが、場所に関しては、前後関係は分別され得ない、ということ指摘することによって、シュバグプタが時間的前後関係と場所的前後関係を類比的に考えていることを批判しているのである。

2.3. シュバグプタからの再反論とカマラシーラの再批判

続いてカマラシーラは、諸極微が部分を有することがなくとも、諸極微に場所的前後関係があるとすれば、部分を有しないという意味で極微と同等な心・心所にも場所的前後関係があることになってしまう、とシュバグプタを批判する。しかしシュバグプタは、「有形であること」という点に関して諸極微と心・心所には違いがあるので、カマラシーラの批判は的を射ていないと反論する。以下、両者の一連の対論を検討する。

TSP(Śā) 679, 17-20; TSP(Kri) 557, 14-17: athāsaty api sāvayavatve deśakṛtaṃ paurvāparyam syāt, cittacaittānām api syāt²⁹, aviśeṣād ity uktam. mūrtatvakṛto 'sti viśeṣa iti cet, na. tad evāsiddham asati sāvayavatve. kevalam paryāyeṇa sāvayavatvam evoktaṃ syāt, nānyo viśeṣa³⁰ iti yat kiṃ cid etat.

また、「[極微は] 部分を有することがないとしても、場所に関して前後関係が存在する」と[シュバグプタが言う]とすれば、心・心所にも[場所に関して前後関係が]あることになってしまおう。[極微と心・心所に部分を有しないという点で]区別がないから、と述べてある。もしも、有形であること[か否か]ということに関して区別があると[シュバグプタが反論すると]すれば、そうではない。[極微が]部分を有するものでないならば、そのこと（極微が有形のものであること）自体は成立しない。しかし（kevalam）、[極微が有形のものであると言うならば、論を追って]順次に、部分を有するものに他ならないこ

²⁸ See 真鍋[2010].

²⁹ ci ste cha dang bcas pa nyid ma yin na yang sems dang sems las byung ba rnam kyang dus kyis byas pa'i snga ma dang phyi ma dag tu 'gyur te Tib. for athāsaty api sāvayavatve deśakṛtaṃ paurvāparyam syāt, cittacaittānām api syāt Skt.

³⁰ ma yin te de nyid ma grub ste / cha shas dang bcas pa nyid yin na rnam grangs kyi cha dang bcas pa nyid du 'gyur ba kho nar zad kyi khyad par gzhan med pa Tib. for na, tad evāsiddham asati sāvayavatve. kevalam paryāyeṇa sāvayavatvam evoktaṃ syāt, nānyo viśeṣa Skt.

とが述べられることとなろう。[更に極微と心・心所には有形か無形かということと]別の区別[も]存在しない。従って、[極微と心・心所に区別がある、というシュバグプタの反論は]無意味である。

ここでのカマラシーラの初めの批判は、シュバグプタも心・心所が場所に関して前後関係を有しないことを承認している、ということをも前提としたものである。諸極微が部分を有しないにもかかわらず場所に関して前後関係を有するとすれば、同じく部分を有しない心・心所にも場所に関して前後関係があることとなってしまう、と矛盾を指摘しているのである。

この批判に対してシュバグプタは、極微は有形のものであり、心・心所は有形のものではないという区別があるので、極微に場所に関して前後関係があったとしても、心・心所には場所に関する前後関係はない、と反論する。このシュバグプタからの反論に対してカマラシーラは、極微が有形のものであるということは、極微が部分を有するものであることを意味する³¹であり、シュバグプタが極微は部分を有するものでないと主張している以上、極微が有形のものであるということは論証されない、と再批判を加えている。シュバグプタが「有形であること」と「部分を有しないこと」を別の概念であると考え、極微を「有形のもの、且つ部分を有しないもの」と考えているのに対して、カマラシーラは、「有形であること」は「部分を有すること」と同義であり、極微が有形のものであれば、それは極微が部分を有するものであることを意味する、と批判しているということである。

更にカマラシーラは、極微と心・心所には有形か無形かということ以外の区別は存在しないので、諸極微が部分を有しないにもかかわらず場所に関して前後関係を有するとすれば、同じく部分を有しない心・心所にも、やはり場所に関して前後関係があることとなってしまうと批判しているのである³²。

2.4. 場所的前後関係は部分を有することなくしてはあり得ない

カマラシーラは、これまでのシュバグプタとの対論の結果、あるものが場所的前後関係を有する場合、それは部分を有することなくしてはあり得ないと結論付ける。

TSP(Śā) 679, 21f.; TSP(Kri) 557, 17-19: tasmāt sarvabhāvānām nyāyye³³ kālakṛte paurvāparye

³¹ シャーキャブッディも、有形のものならば方位による支分の区別を持つものであり、方位による支分の区別を持つものは部分を有するものである、としてシュバグプタを批判している。See 森山[2003] pp. 12-14.

³² この極微と心・心所に有形・無形という区別があるか否かという視点からのシュバグプタに対する批判は、デーヴェンドラブッディとシャーキャブッディを受けたものであることが森山[2003]によって指摘されている。

³³ nyāyye ms2, TSP(Śā), TSP(Kri)] nyāyyen{e}a (or nyāyyā na? or nyāyyete?) msl, rigs pa ma yin na Tib.

sati, yad etad aparam adhikaṃ kasya cid deśakṛtaṃ paurvāparyam, tat sāvayavatvam antareṇa na sambhavati.

それ故に、如何なるものにも論理にもとづく時間に関する前後関係が存在する時、あるものに〔時間的前後関係とは〕別の、更なる場所に関する前後関係がある場合、それ（場所に関する前後関係）は部分を有することなくしてはあり得ない。

今までの議論によって、部分を有する・有しないにかかわらず、一切のものには時間的前後関係が存在することが論証され、更に場所的前後関係を持つものは必ず部分を有しなければならないことが論証された。シュバグプタは、場所的前後関係に置かれた多くの極微に方位が想定されると考えていた³⁴が、以上のことから、あるものが場所的前後関係に置かれ、方位による支分の区別を持つとすれば、そのものは部分を持たなければならないことが帰結されるのである。

3. 結論

カマラシーラとシュバグプタとの極微の实在性に関する対論を検討してきたが、その結果、カマラシーラとシュバグプタは「時間的前後関係」と「有形であること」という二つの概念に関して互いに異なった理解を持っていることが明らかとなった。

まず、「時間的前後関係」に関する両者の理解の違いは以下のようなものである。シュバグプタは、「連続性」という観点から、時間的前後関係は場所的前後関係と類比し得るものと考えていた。一方カマラシーラは、勝義には現在のものしか存在しないと考え、時間的前後関係は因果関係を通じて分別されるものと考えている。従って、時間的前後関係は場所的前後関係と類比し得ないものと考えていたのである。

次に、「有形であること」に関する両者の理解の違いは以下のようなものである。シュバグプタは、「有形であること」と「部分を有すること」を別の概念であると考えていたため、極微が部分を有しないものであることと、有形のものであることは矛盾しないと考えていた。しかしカマラシーラは、「有形であること」は「部分を有すること」と同義であると考えていたため、極微が部分を有しないとすれば、極微が有形なものではあり得ないとシュバグプタを批判するのである。

以上のような二つの概念に関する理解の相違が両者の間にあることによって、シュバグプタは部分を有しない極微に場所的前後関係が存在すると主張し、一方カマラシーラは、極微に場所的前後関係が存在するとすれば極微は部分を有するものでなければならないと主張しているのである。

³⁴ See 真鍋[2010].

参考文献

一次資料

- BASK *Bāhyārthasiddhikārikā* (Śubhagupta): P No. 5724, D No. 4244, see Shastri[1975].
- ms1 *Tattvasaṃgraha, Tattvasaṃgrahapañjikā manuscript*, Jesalmer Cat. No. 377 (TS); No. 378 (TSP).
- ms2 *Tattvasaṃgraha, Tattvasaṃgrahapañjikā manuscript*, Pāṭaṇa Cat. No. 6679 (TS); No. 6680 (TSP).
- PBh *Praśastapādabhāṣya* (Praśastapāda): *The Praśastapāda Bhāṣya with Commentary Nyāyakandali of Sridhara*, edited by Vindhyesvari Prasad Dvivedin, Baranas 1895, 2nd 1984 (Sri Garib Dass Oriental Series No. 13).
- PV *Pramāṇavārttika* (Dharmakīrti) See PVBh.
- PVin *Pramāṇaviniścaya* (Dharmakīrti): *Dharmakīrti's Pramāṇaviniścaya Chapters 1 and 2*, critically edited by Ernst Steinkellner, Beijing – Vienna 2007.
- PVBh *Pramāṇavārttikabhāṣya* (Prajñākaragupta): *Pramāṇavārtikabhāṣyam of Vārtikālaṅkāraḥ of Prajñākaragupta (Being a commentary of Dharmakīrti's Pramāṇavārtikam)*, deciphered and edited by Tripiṭakācārya Rāhula Sāṅkṛityāyana, Patna 1953.
- TSP(Kri) *Tattvasaṃgrahapañjikā* (Kamalaśīla): *Tattvasaṃgraha of Śāntarakṣita with the commentary of Kamalaśīla* Vol. 1, edited with an introduction in Sanskrit by Embar, Krishnamacharya, with a foreword by Late Dr. B. Bhattacharyya, Baroda 1926, Reprint: 1984 (Gaekwad's Oriental Series No. 30).
- TSP(Śā) *Tattvasaṃgrahapañjikā* (Kamalaśīla): *The Tattvasaṃgraha of Ācārya Śāntarakṣita with the 'Pañjikā' commentary of Ācārya Kamalaśīla* Vol. 1-2, edited by Swāmī Dwārikādās Śāstrī, Varanasi 1968 (Bauddha Bhāratī Series No. 1-2).

二次資料

- Frauwallner, E.
[1961] "Landmarks in The History of Indian Logic", *Wiener Zeitschrift für die Kunde Süd-und Ostasiens* 5 (Kleine Schriften に再録).
- Jhā, G.
[1991] *The Tattvasaṃgraha of Śāntarakṣita with the Commentary of Kamalaśīla* Vol. 2, translated into English by Jha, Ganganatha, Baroda 1939, Reprint (Gaekwad's Oriental Series No. 83).
- Shastri, N. A.
[1975] *Bāhyārthasiddhikārikā*, Bulletin of Tibetology Vol. 4, No. 2.
- 一郷正道

部分を有しない極微に場所的前後関係は存在し得るか（真鍋智裕）

- [1985a] 「極微説批判——シャーンタラクシタ、カマラシーラ、ハリバドラの所論」『中観莊嚴論の研究——シャーンタラクシタの思想』文栄堂.
- [1985b] 「シュッバグプタとシャーンタラクシタ」『中観莊嚴論の研究——シャーンタラクシタの思想』文栄堂.
- [1985c] 「シャーンタラクシタの解脱論——『中観莊嚴論』第 67-90 偈の解説」『中観莊嚴論の研究——シャーンタラクシタの思想』文栄堂.

栗原尚道

- [1999] 「*Tattvasaṃgraha*, *Bahirarthaparīkṣā* にあらわれる極微説批判」『九州龍谷短期大学紀要』45.

清水公庸

- [1983] 「因果を巡る論争 TSP. "*Karmaphalasambandhaparīkṣā*" 試訳」『南都仏教』51.

菅沼晃

- [1981] 「『撰真実論』外境批判章訳註（一）」『勝又俊教博士古稀記念論集 大乘仏教から密教へ』春秋社.
- [1985] 「『撰真実論』外境批判章訳註（二）」『壬生台舜博士頌寿記念 仏教の歴史と思想』大蔵出版.

戸崎宏正

- [1979] 『仏教認識論の研究 上巻』大東出版社.
- [1989] 「法称著『ブラマーナ・ヴィニシュチャヤ』第 1 章 現量（知覚）論の和訳（4）」『哲学年報』48.

真鍋智裕

- [2010] 「極微において方位の区別と単一性は両立するか——カマラシーラとシュバグプタの対論」『印度学仏教学研究』59-1.

神子上恵生

- [1983] 「シュバグプタの極微説の擁護——知識の認識対象の問題をめぐって」『仏教文化研究所紀要』22.
- [1997] 「唯識学派による外界対象の考察（1）——*Tattvasaṃgraha* と *Tattvasaṃgrahapañjikā* の第 23 章外界対象の考察」『インド学チベット学研究』2.

森山清徹

- [2003] 「シャーンタラクシタの中観思想の形成とシュバグプタ、シャーキャブッディ——自然界（原子、物質）と知識の峻別の根拠」『仏教大学総合研究所紀要』10.

（まなべ ともひろ 早稲田大学大学院）